

女性初の職業も 自分らしく 道を切り開いて

北村 麻子 さん
(青森市)

Profile

青森市出身。2012年「青森市民ねぶた実行委員会」より依頼され、史上初の女性ねぶた師としてデビュー。2017年「紅葉狩」で最優秀制作者賞とねぶた大賞を受賞。現在、2歳の長女を育てながら、2018年のねぶた制作に向けて準備中。

「自分でねぶたを作りたい」 思いを叶え女性初の作りに

35歳という若さにして、一人前のねぶた師。しかも史上初の女性ねぶた師である北村麻子さん。

青森ねぶたの第一人者である北村隆さんを父に持つ麻子さんは、25歳の時に隆さんが制作した「聖人聖徳太子」を見て感銘を受け、「この世界に入りた」と思うようになりました。とはいえ、女性ねぶた師の前例はないどころか、その概念すらない世界。

麻子さんは、どうしたら作り手になれるか思いを巡らせました。まずは、具体的なことは一切言わずに、隆さんの小屋へ通うことに。しかし、毎日通ってみたものの、何か指示されることも、誰かが仕事を教えてくれることもありません。言ってみれば、みんなライバルという厳しい現実。このままではスタッフで終わってしまうと思った麻子さんは、隆さんの指導のもと、自分で制作費を出して小さいねぶたを作りました。続いて、隆さんが主導する「後継者育成ねぶた」の制作も手がけ、さらにその翌年ある団体の前ねぶたを作りました。すると、「前年のねぶたと見比べて、伸びしろを感じた」と「青森市民ねぶた実行委員会」の会長の目にと

まったのです。正式に依頼を受け、2012年、29歳で念願のデビューを果たしました。

前例のない出産・育児 不安に負けず奮闘する日々

29歳でデビューした麻子さん。実は修行中に結婚していました。制作期間に入れば、ずっと小屋に入りっぱなしという特殊な世界を理解してもらうため、夫をスタッフとして小屋に招くなど、家庭との両立も目指していたのです。そうして夫や家族の理解を得ながら活動を続け、33歳の時に第一子を出産します。それでもねぶた制作が途切れることはありません。「出産するのでお休みします、と言える世界ではありません。だから、2015年のねぶたは、お腹が大きいまま作りました」。このとき麻子さんは、人知れず悩み抱えました。「お腹の赤ちゃんに影響がないのか、ものすごく不安で。染料は毒と一緒になんです。妊娠中に扱っても大丈夫なのか、前例がないことなのでわからなくて。恐かったのでマスクは欠かさず、ボンドも白玉粉を練ったものを作り、代用したんです」。できることは何でもやり、不安を拭きました。このときだけは隆さんにも手伝ってもらい、まわりのスタッフのサポートも得て、無事、制作も出産も乗り切ることができました。

大切なのは自分らしく まわりと比べず、ゆつくりと、未来へ

デビュー一年目でいきなり優秀制作者賞を受賞し、「父が作ったのでは」「女性だからいきされた」という声を耳にして、麻子さんは、「誰にも何も言われないようないいねぶたをつくらう」と奮起しました。そして2017年、35歳でついにねぶた大賞を受賞しますが、今度はプレッシャーに襲われているといいます。「大賞をいただいたいて、本当に苦しくなるのは、これからなんだと感じています」。

仕事において重要な時期ですが、麻子さんにとって今は、子どもが2歳で育児も最も忙しい時期。育児との両立も目指さなければなりません。

「妊娠中も大変だと思いましたが、生まれたらもっと大変で」と麻子さん。一時期利用した保育園は病気がきっかけで退園。現在は自宅で子育てしているのです。麻子さんと夫の双方の両親たちに手伝ってもらいつつ、「子育てしながらこの仕事を続けるのは間違いではないか」と思ってしまうこともあるそう。「でも、ここで辞めるのが娘のためになるかといえば、それも違う気がします。今大変ですが、やるしかない」と話します。

だから、今の麻子さんの目標は、お子さんとの時間を大切にしながら、毎年一台の大型ねぶたを完成させること。「娘が生まれてから、ねぶたに対する考え方も変わってきました。ねぶたは勝負の世界ですが、でもそれだけではなくて、誰かにいい影響を与えるねぶたを作りたいなと。例えば、落ち込んでいる人が、ねぶたを見たときだけでもワクワクしたり、明るい気持ちになったり。ねぶたの明かりで誰かの心に明かりをともしせるようなものを作りたい」。そんな風に思いながら、麻子さんは、次のねぶたの準備に取り掛かっています。

「ずっと先のことを思えば、ほかのねぶた師さんのように大きいことをやりたい、例えば海外遠征などにも行ってみたいという気持ちもあります。でも私にとって今一番大切なことは、目の前のことを一生懸命にやること。焦らないで、まずは制作を続けていくことが大事なのだと思います」。



(取材：井藤 雪香)